

ルビュ言語文化教育

教育・研究 > 教育実践 > 先生・専門家の声

「ルビュ言語文化教育：Revue Langue, Culture et Education (RLCE)」は、「個人が主体として生きることのできる、暮らしやすい社会の実現」に寄与することを目的として発行されます。人の「考えていること」は、マニュアルを用意すれば明確になるようなものではなく、具体的な意味のあるコミュニケーション活動の場を通じて明らかになっていくものです。言語文化教育研究所では、どのような社会でも個人が主体として生きていける“ことばの力”をばくむ「言語文化教育」を提案し、その普及と発展につとめています。ことば・文化・教育に関する情報・提案などを毎週金曜日にお届けします。

発行周期 ほぼ 週刊 最新号 2014/01/17 部数 1,576部 メールマガID 0000079505 発行者サイト 個別ページ

最新号をメルマガでお届けします メールアドレスを入力

規約に同意して 登録

解除 解除

登録した方には、まぐまぐの公式メルマガ（無料）をお届けします。

[PR]TOEICを150点アップさせた特別レポート。期間限定で無料公開中

2010/04/23 [RLCE100423] ルビュ言語文化教育 第323号

<< 前の記事

最新の記事

次の記事 >>

[2010-04-23] *Revue Langue, Culture et Education, n. 323*

#####

[週刊] ルビュ言語文化教育 (RLCE) — 323号 —

#####

■ 323号 もくじ

◇ 研究所より：考える喜び 細川英雄

◇ わたしから一言：考えるための日本語あるいは喜びのための日本語
パオロ・バルボニーニ

◇ 新刊紹介：加藤好崇『異文化接触場面のインターアクション—日本語母語話者

者として日本語母語話者のインターアクション』、田中ゆかり『首都圏における言語動態の研究』笠間書院、石黒圭『読む「技術」光文社新書

◇ お知らせ：ルワンダ応援祭り、リテラシーズ投稿募集、ポトフトオリオ研究

報告書頒布、ほか

記事履歴

2014/01/17 08:00

2014/01/10 08:00

2013/12/27 17:53

2013/12/20 08:00

2013/12/13 08:00

2013/12/06 08:00

2013/11/29 08:00

2013/11/22 08:00

2013/11/15 08:00

2013/11/08 08:00

■ わたしから一言 ■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■
 考えるための日本語あるいは喜びのための日本語

パオロ・バルボーニ

R L C E 3 0 9 にマルチェッラ・マリオッティの「考えるための日本語」における経験を読んだ。

その考察の中で面白い点の一つある。それは、「考えるための日本語」という、複雑なプロジェクトへの参加同意の支持がどのように得られたかという観点である。

同意を支持する方法、つまり学習者の動機を支持する方法は、次の三つの視点から考察できる。

a. 自分がやっていることが、活動毎、ミーティング毎に「将来設計」を実現する、つまり未来における自分のイメージを実現するために、自分が選んだ戦略への力になってくれる実践であることに基づく同意。

これは心理学者が EGO と呼んでいて、70年代に RENZO TITONE (レンゾ・ティトーネ) が作図した上記の E g o d y n a m i c (自己動力/自己が人を動かす) Model の名もここからなる。将来における自分のイメージは困難な時があっても「考えるための日本語」のようなタフなコースにもついていけるような助けになるものである。

b. インプットと提供されている実践の質に基づいた同意である。多様性のあり、美学的に美しく、学生にとって意味のあるインプット（これは上記の E g o d y n a m i c モデルと接する点であるが）、また冷静な環境の中でやりやすいタスクとして感じられるインプット。これら自体が同意を生み出し、そしてどれほど長くて大変なプロジェクトにでも巻き込まれたままで居残る意思も生み出すものである。

上記は Input Appraisal (インプット評価) Model といい、80・90年代に John Schumann が練ったモデルである。

c. 以下の三つの要素の相互作用に基づいた同意。

C. 1. 義務感 (Sense of duty) : 将来における自分のイメージと関連のある理由で、大変な時期も我慢できる。ティトーネのモデル参照

C. 2. 必要性の意識 (Consciousness of our needs) 例: どんな言語にしても言いたいことを言えるためにはまず自分の考えを探る必要がある

C. 3. 喜び (Pleasure)

これは、上記の二つのモデル (Egodynamic と Input Appraisal モデル) を引き継ぎながら、それらを感情的な視点から見直している Venetian School (訳注) のモデルである。

さて、喜びの視点から考究してみよう。

人間の行動や動機への刺激として、また同意の創造への刺激としての「喜び」は、決して新しい発見ではないが、Japanese for thinkingにおける「喜び」とは何だろうか。

先ほど考察したモデルに戻ってみよう。「喜び」はまず第一、学習したい人として、また（想像した、夢で見た、ほしがっていた、つまり喜びを起こし得る地としての）日本との付き合いを改善したい人としての自分を意識することから来るだろう。また、それは、人間の特有の喜びである『学習／習う喜び』自体からも来るだろう。また、自分のDUTY責務を果たしたことからも、そして自分の必要に応じたことから来るだろう。

いうまでもなく、これらだけが可能な喜びであるのではない。直感的に分かる喜びにすぎない。論理構造が明確な教育的なプロジェクトなら、述べた「喜び」の類よりもっとあるかもしれない。たとえ課せられたタスクの実施においても、学習過程の計画においてだんだん自律できるようになることや、ちょっと前なら乗り越えられなかったチャレンジを乗り越えられるようになることによって自分の前進を実感できることなどから来る喜びもあるだろう。これらの喜びの類は人間に本来備わっている喜びであり、自ら生産した喜びであり、THINKING（考える）という能力と密接な関係にある喜びである。そのTHINKINGが日本語で行われているかどうかは関係なく。

心理的な喜びは次々に重要な生化学要素に変身する。喜びはセロトニンの分泌を刺激する傾向がある。そして、アドレナリンをノルエピネフリンに変える。この二つの神経伝達物質は新しいシナプスができる（発生される）ように、つまり学習が安定した習得になるために不可欠な神経伝達物質である。喜びの代わりにストレスがあった場合、たとえば、自分の能力に対する不安（パフォーマンスの不安）をいだいたり、圧縮感を感じたり、先生や同級生にたいして面目を失う恐れがあったりすると、神経伝達物質ではなく、シナプスをブロックする物質、すなわち習得を阻止するステロイドが分泌される。

Marcella Mariottiの生活と学習の体験から言えば、Japanese for thinkingを生み出したことが、本人が意識的かどうか別にし、その同意・動機・喜びを生み出すことができたと思われる。ただし、自分の経験からいうと、すべての育成の体験が同じ質ではないのだから、当のリレーは、Japanese for thinkingというプロジェクトにおいて何がMariottiに喜びを感じさせたのかについて考察するための良いきっかけになるのではないかと思われる。もちろん、これに答えられるのは彼女だけなのだ。

PAOLO E. BALBONI (ヴェネツィア大学)
(日本語訳: マルチェッラ・マリオッティ)

(訳注) Venetian School: イタリアでの初めての言語教育学 (LTM: Language Teaching Methodology) のコースはヴェネツィア大学でGiovanni FreddiとRenzo

心理的な喜びは次々に重要な生化学要素に変身する。喜びはセロトニンの分泌を刺激する傾向がある。そして、アドレナリンをノルエピネフリンに変える。この二つの神経伝達物質は新しいシナプスができる（発生される）ように、つまり学習が安定した習得になるために不可欠な神経伝達物質である。喜びの代わりにストレスがあった場合、たとえば、自分の能力に対する不安（パフォーマンスの不安）をいだいたり、圧縮感を感じたり、先生や同級生にたいして面目を失う恐れがあったりすると、神経伝達物質ではなく、シナプスをブロックする物質、すなわち習得を阻止するステロイドが分泌される。

Marcella Mariottiの生活と学習の体験から言えば、Japanese for thinkingを生み出したことが、本人が意識的かどうか別にし、その同意・動機・喜びを生み出すことができたと思われる。ただし、自分の経験からいうと、すべての育成の体験が同じ質ではないのだから、当のリレーは、Japanese for thinkingというプロジェクトにおいて何がMariottiに喜びを感じさせたのかについて考察するための良いきっかけになるのではないかと思われる。もちろん、これに答えられるのは彼女だけなのだ。

PAOLO E. BALBONI (ヴェネツィア大学)
(日本語訳: マルチェッラ・マリオッティ)

(訳注) Venetian School: イタリアでの初めての言語教育学 (LTM: Language Teaching Methodology) のコースはヴェネツィア大学でGiovanni FreddiとRenzo Titoneによって設立された。また、言語教育学論に専心する言語科学学部が成立されたのも、初めての言語教育教授の席が設けられたのもここであった。バルポーニ先生はFreddiとTitoneの努力を引き続き、学術研究と、言語ポリシーに置ける活動と、教師間で新しいアイデアを広めることを総合的にリンクするようにつとめている元学部長である。すでに四世代の研究者の貢献が大きいVenetian Schoolは、言語教育学とは、言語科学とコミュニケーション論、文化と社会学、心理学と脳科学、教育学と方法論といった学問の間の相互作用からなるものであると主張する。

(Language Teaching Methodology: The Venetian School. LANGUAGE ACQUISITION AND LEARNING: DOCUMENT 1, バックカバーより)

パオロ・バルポーニ (Paolo E. Balboni)

現在、ヴェネツィア大学言語科学学部、現代言語教育教授、外国語講師定款編集のための学長代理、『外国語としてのイタリア語 ("ITALIANO LINGUA STRANIERA" ITALS)』研究所長、『コミュニケーション論 (TEORIA DELLA COMUNICAZIONE TCLAB)』研究所長、『国際現代言語教師連合体 Federation internationale des professeurs de langues vivantes』(FIPLV) 副学長、『イタリア言語教育と教育言語学の会 (SOCIETA ITALIANA DI DIDATTICA DELLE LINGUE E LINGUISTICA EDUCATIVA)』事務局長